

医薬品の使用ならびに価格に関する国際比較研究

【研究概要】

I 研究目的

薬剤費を構成する要因は医薬品の価格と使用量に分解することができるが、本研究では、使用量に着目し、国際比較のためのデータソースとして IMS データを、また国内の医薬品使用状況の分析のために社会医療診療行為別調査の個表データを用いた分析を行った。また、OECD Health Data に公表されている医療支出推計の推計範囲についても調査を行い、医薬品支出の国際比較の課題を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

研究は、①OECD Health Accounts における医薬品支出の国際比較、②IMS データによる医薬品使用の国際比較、③社会医療診療行為別調査データを用いた国内医薬品使用の分析、④海外における薬剤使用の研究状況調査のそれぞれから構成され、①は OECD 担当者へのアンケート調査、②は IMS データを用いて高血圧、高脂血症、消化性潰瘍、糖尿病、中耳炎の分析、③は当該個表データを用い、②の傷病に加え喘息、肺炎等を分析した。④は、英仏の処方せんデータの利用についてインタビュー調査を行った。

III 結果と考察

①OECD 加盟 30 か国中 15 カ国から回答が得られ、医薬品支出額に含まれる項目がかなり違うことが明らかとなった。②医薬品の処方せん割合は国によって違いが見られ、また 1 処方せんあたりの平均処方日数は、日本は諸外国に比べ著しく短いことが明らかとなった。③外来患者の薬効別の使用割合を見ると、高血圧では、Ca 拮抗剤の使用割合が最も多く、高脂血症では HMG-CoA 還元酵素阻害剤、糖尿病では SU 剤、消化性潰瘍ではその他の抗潰瘍剤が多かった。④英仏では医療費の償還を行っている疾病金庫に、医師の行った診療行為や償還対象となる処方薬等の情報が集まり、データベース化され、利用が進んでいる。

IV 結論

医薬品支出額の国際比較においては、各国の制度の違いによる推計範囲の違いが存在し、支出額の単純比較は問題がある。また、医薬品使用についても各国の特徴が存在し、医薬品価格の違いも考慮するとともに、各国制度と医薬品使用の内容を考慮した国際比較が重要である。